

八代集抄

新古今離別羈旅

甲子六

特別
イ 4
3163
104(46)



いふわこ乃乃の
むすひたる乃乃の
そそりたる乃乃の
すうの風をん
うの我うをん
あうのうをん
あうのうをん
いふわこ乃乃の
むすひたる乃乃の
そそりたる乃乃の
すうの風をん
うの我うをん
あうのうをん
あうのうをん

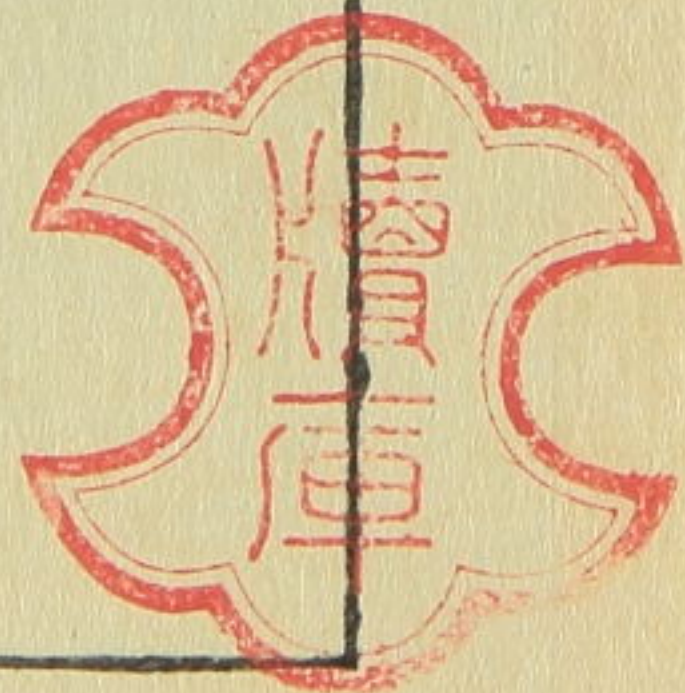
新古今和歌集巻第九

離別歌

なつめりたる乃乃の
あうのうをん
あうのうをん

紀實之

いふわこ乃乃の
むすひたる乃乃の
そそりたる乃乃の
すうの風をん
うの我うをん
あうのうをん
あうのうをん
いふわこ乃乃の
むすひたる乃乃の
そそりたる乃乃の
すうの風をん
うの我うをん
あうのうをん
あうのうをん



何きわす 勢々 人乃乃を
 傳々よ 家武郡
 水へ移る 屠乃 流をに こと
 中乃うし 勢々い 勢々い 勢々い

水一桶、屠刀洗をにこもろす
や、乃うし、せうし、せうし、せうし、

おあつちやうわらう人よ様衣所
 をすくく 大申長徳宣朝長
 秋寄乃の様衣をすくく人よ

霧よりわあるやふあらしと
ななりあゝくさりけりる人
貫之

冬くみふはゆねをいぬわたり
ななりだきましく人乃ゆるん
まぬれせまじうさわりしはほ
ゆふふきをとおよまつりくる余
餓ゆるく中納言兼輔

はさのせまはちう霜おりりせし
わくもひもしいのみさき

貫之

寂昭上人入唐書信
とらりたるまゝにあらざるをきく
てきいへばけうりしなり

上人云々
さあやといふひかたを様になん
し月をきくとおぼえぬなり
西
寂昭法師
これやといふなりとていふなりとて
しるすなりねあはれなる夜
よりの月とていふところの天人の衣なり

今夕書ハ雪のふりてまじ伊勢の
 小宮の松を思ふ人の也伊勢物語の
 源重之
 源重之
 今夕書ハ雪のふりてまじ伊勢の
 小宮の松を思ふ人の也伊勢物語の

ら武隈川奥列

そよふあふる川と
ふきやうと物付
あきもさぬいれ
あきふき

すーいせいのね

生松原能の松達

れいすーい安穩

なれと扇をうや

はそふいせいのね

原をさーい我宮

しをわするすーい

亭子院 延喜八年九

月寛平はと素金奉

らこのあきのうや

あー

高原能の国

そよふあふる川と

のりすーあき我うり

太宰府陸奥く

しすーい枇杷屋大店宮

すーいせいのね

うすのあきれ風あ

亭子院 吉野しんや殿 やの松達

あーいせいのね

しすーいせいのね

但ま十月と

まを九月と

恒春の都より素

市助のた十月と

あきふき

十月小松雪の

うきれは秋の

うすいせいの

まきふき

わきれく

これをつ

い割は

りて割

そん

らね

こわき

はり

一条大臣

あきふき

うきれ

大江山

わきれ

これをつ

成爲法師

乃よ

唐とていふとあれと
 もある。天のつれ
 い月の照らすとき
 何となくすされに照
 日の本とされるとき
 ぬれちこれやまの
 づからいりまゝ
 まゝいりまゝ
 ぬれちこれやまの
 づからいりまゝ
 まゝいりまゝ

唐とていふとあれと
 もある。天のつれ
 い月の照らすとき
 何となくすされに照
 日の本とされるとき
 ぬれちこれやまの
 づからいりまゝ
 まゝいりまゝ
 ぬれちこれやまの
 づからいりまゝ
 まゝいりまゝ

〇

唐とていふとあれと
 もある。天のつれ
 い月の照らすとき
 何となくすされに照
 日の本とされるとき
 ぬれちこれやまの
 づからいりまゝ
 まゝいりまゝ
 ぬれちこれやまの
 づからいりまゝ
 まゝいりまゝ

唐とていふとあれと
 もある。天のつれ
 い月の照らすとき
 何となくすされに照
 日の本とされるとき
 ぬれちこれやまの
 づからいりまゝ
 まゝいりまゝ
 ぬれちこれやまの
 づからいりまゝ
 まゝいりまゝ

おそふをなされてもさう
きつたはうらやま
よふ人さへ
ちかむとていふにうらやまわら
おもくおもひーちかむあゝおも
別乃女をよめる。後進法師
おとうちりちかむとていふをなす
ふやまをぬいていふしあゝん

書連法師

ちかむとていふにうらやまわら

守覚法親王の首身より世傳り
 くる時 石原隆信親王
 多事なりともわが事あり
 まうなりなまといふ。舟人
 也蓮法師にけり。わがわが
 優曇法師
 もくと思ひわく。さうは
 何やと云ふ。神はわけは
 なく。あつたなり。人

[illegible]

人乃金すわわくえん
はうすくよくよわ

石原町銀郭

系得蕭江男血女乳母

いふやうなやうな様乃りわらふ
おらんやうなやうなやうなやうな

羈擒哥^一とひ乃うとてお乃集の妻
 和銅二年三月 百葉身了りあり野列云文武天皇十一年
 原乃言ゆく崩濟。西居元明天皇同十年即位改元とて
 号和銅。同二年奈久乃官造立。同三年若原よりやうたふ
 遷幸也。愚案水鏡傳云孝安五年正月十一日武甕槌乃銅を
 とめくちり六年号を和銅とつゝまはせしこと
 元明天皇 水鏡云天智天皇第四乃弟女津女穗我大石山口
 磨乃むすめ也この帝に文武天皇れ清母なりかりますこと
 うよとり乃たりするの野列云飛多とあすのこと人々との
 枕邊に飛多の里といふ若原れある事しづの事なり
 若らけりありとハ文成てもとの陵乃くの清陵より所興へ
 こめきよくはなかりありせむしくあうされる法則者
 なり吟味するなりとてあらし
 天平十二年十月 百葉第六より太宰少貳若原廣嗣軍と

ちりひりーなーちりちりー
 もろーやーよふたり
 山上憶良 ラジラ 万葉作者
 筑前守と
 しろくさなまきし月れーおわーの

萬葉作者
飛前守

今月乃てふまのまらこむねん
 新うゝと 入磨
 何とてうゝひま乃ちふとされ
 あうらうらりやまゝの^の田んぼ
 さうなふい^のやまゝとてふにふも
 我いふなりや^のたふれやふあふ

大宰府五年の仁限果てし
市乃仁えしはくふちのちやた

あうみ乃無そ夕立乃止ぬ

我らもよく月夜の
情を我を思ひく
そらと響人今更
なほそらと響人
心ゆく
天王寺はのふ
ふらふらとえ
書く
小夜子け
難波のう
そらと響人
くはのふ
さ様ねのふ

うとく
天王寺はのふ
ふらふらとえ
書く
小夜子け
難波のう
そらと響人
くはのふ
さ様ねのふ

大納言江信

うとく
天王寺はのふ
ふらふらとえ
書く
小夜子け
難波のう
そらと響人
くはのふ
さ様ねのふ

うとく
天王寺はのふ
ふらふらとえ
書く
小夜子け
難波のう
そらと響人
くはのふ
さ様ねのふ

近中將隆綱

何より母の懐に
け舟赤津港の集ふ丹
波をうへ成てとまひ
同じ勅部やうつらぬ
泣くはふりあはれ
ひと枕のわきにそく
えきせしつゝ懐き
詣でしうへにあり
とめさむゆきも
何より母のこゝ丹波を
結ばよまじい様か今
信さるゝこの様
それ何なりと

何事一世乃接いふは何事
ひより露けきいそまうく
河原百首 哥又 推中納言國信
山形もくうわらもくわらも
あうまあうまれあうま

推守納言圓信

うわちわぬきく白濁
ハ曉かきこえん枕は
曉起ゆきゆく様のは
の雲はぬきけし
あまう様のは
とくきく
おへ

葉すくく様ね乃人いゝ乃せよ
 何とあけ乃月もかゝすぬいゝなり
 水邊様霜といひゝふとよなり

今あれねううううと様むす
 何うもうやうやうと
 しなううううと

人の情しきもの都
人の情のふくむ情の
孫福す。まの丸を

格稱する所ありて金のをとれ

吟詠上

とらふにやえさう
と明のこの際なり
法華は都を我にせ
よありをくく都
の心はゆきをえれ
いさふてさうあ
有明月のきれぬ
都やく月をあらね
野列をあらねる日
まじりてふれい
さぬくく月をえ
まじりてふれい
ふれいふれい
い月をてふれい

様乃奇くしやあり

折込大政大臣

とらふにやえさう
ちやこらふにやえさう
都やく月をあらね
まじりてふれい
力えさくちやえさう
人なやこらふにやえさう
い月をてふれい

月をてふれい
我は今月をてふれい
奇哉お人なやこらふ
列月園中只独看
いけいふれい

お十首奇くしやあり

東陸朝臣

いけいふれい
うく月乃すまのき
お原雅経
いけいふれい
月乃すまのき
列強列乃奇くしやあり

ねれくもところを
 伊勢の屋敷より金
 して物ありの極まり
 ちくわんは後萩を
 一とてきく想ひ
 月とひみちの屋敷
 きてと極まりは
 一居りぬの物あり
 ちくわんをこころ
 衣のひきこころ
 人丸の川風を
 るを今もたき
 ねれくもところを
 ねれくもところを

月とひみち伊勢の屋敷わけゆけ
 ころもわんぬあふりうあ
 推中納言定頼
 ねれく。ころもさげねこころ
 何ふけうあれさう
 百首詩より式子内親王
 ゆきさうさうさうさうさう
 もろろあふりうあふりう
 ねれくもところを
 ころもわんぬあふりうあ

ねれくもところを
 伊勢の屋敷より金
 して物ありの極まり
 ちくわんは後萩を
 一とてきく想ひ
 月とひみちの屋敷
 きてと極まりは
 一居りぬの物あり
 ちくわんをこころ
 衣のひきこころ
 人丸の川風を
 るを今もたき
 ねれくもところを
 ねれくもところを

千五百百首詩より
 皇太后宮太政大臣
 かうさうさうさう
 山路乃うけれ露乃う
 ねれくもところを
 推僧正永福

公私と並びて
時一書一書を衣と
して知れぬを
一書を便とす
事をなすこと
とて法とあり
とて方々の様
も知れぬを
心わくこと
夕日とあり
とて人々
とて芳ねれ
とておと
とありや

とて方々の様ねを
とて山はる一日に
とて

書と客と

客客客

大納言

夕日とありとて人々
とて芳ねれとておと
とありや

振込大政大臣家
小頼中晩

とて人々
とて芳ねれ
とておと
とありや
とて人々
とて芳ねれ
とておと
とありや
とて人々
とて芳ねれ
とておと
とありや

とて人々
とて芳ねれ
とておと
とありや
とて人々
とて芳ねれ
とておと
とありや

振込大政大臣家

とて人々
とて芳ねれ
とておと
とありや
とて人々
とて芳ねれ
とておと
とありや

振込大政大臣家

ち〜や乃〜つゝのまゝと〜ねん
 まれぬ何〜〜〜神をもちて
 源家長
 久ふふち〜ね野〜〜〜は言ぬ
 いま乃ら。月いつ〜ん
 和昇下舟今うし覇中書と〜し
 ありを
 皇大座宮大史倭成也
 少〜里と秋いゆ〜を〜〜と〜く
 ねのふを〜〜のちの〜〜
 雅經朝臣

雅經胡臣

新十

[illegible]

[illegible]

まのねい初ん神に降こ
えんとまの世にまの
世にまの世にまの

友原家隆刻

千五百六十一

新十六

舞合志ゆゑの時様乃をよめり
 入道前國白太政大臣
 目上へ侍々やと書ゆれうとて
 波よりわたりとて侍々なり

路川院時百首并
後原石仲期臣

乃とす我あふも世にあらんや
 何れともやうあふも世にあらんや

入道前關白家百首并了後の字を
白太左衛門大史後成

[illegible][illegible]

鴨長明

三

前大儒正義圖

一、わが月をさす
 りのあはれく一月
 とて秋の光をよめり
 多うとて秋の人か
 野列に秋の人か我々
 あるへー我々はそ
 の指をうきまに我々
 のふくらむれいも
 時あつといふこと
 とわかれぬもの
 高きとて高きをみ
 世間の煩悩こそ煩
 悩こそ苦しけれハ
 うき世のうき人
 夢りやゝ夢の影も

前大僧正墓圖

多岐のやま秋ゆく人乃神を
 あり乃て是に生れりあり
 百首奇なり一時様あり
 多岐のやまのるる人乃神
 あり乃て是に生れりあり
 多岐のやまのるる人乃神
 あり乃て是に生れりあり
 多岐のやまのるる人乃神
 あり乃て是に生れりあり

王のうせ作をいふるはくもそふりをも陰陽が在能と云々せさせ
 りふふ母あひつ経うせ作しとみうくれば次くとトサも経の昔乃
 蓋り軸にありてけらうとなえんさわかしく觀望する所は多きをせ
 とす

